



主張

「確かな学力」と言われて思うこと

松本芳孝

学校教育法で、「学力の三要素」が定義されていることから、「学力」は、知識・理解だけでなく、思考力・判断力・表現力、そして学ぶ意欲なども含めて総合的に捉えるものであるが、いまだ「学力」を単に「知識の量」と認識している方々は多い。全国学テも、「学力」の一部の指標に過ぎないと言っても、数値化されたものが「学力」の全てかの様相である。

ところで、昨年八月に山口県で行方不明となった二歳児を、捜査活動を開始されて三分で発見されたボランティアの方は、御本人曰く、「私には学がないが」とおっしゃっているようだが、「思考力・判断力・表現力」など社会を生き抜く力としての「確かな学力」は非常に高いということに異論はないと思う。このように「思考力・判断力・表現力」や「主体的に学習に取り組む態度」を評価すること、とりわけ数量化することは、十分に時間をかけて準備をしていくことが必要であると考える。またこのような力や態度は、二〇年、三〇年を経てやっと表面化してくるものではないか。

さて、「確かな学力」の育成ということ、なるほどと思ったことがある。一つは、一〇年程前、国の文教科科学委員会が当時の文科大臣が、「従来と比べると、家庭と地域の教育



力は非常に落ちていくということ、教えるべきことをきちっと学校現場で教えられない雰囲気があるということ、学校の先生が非常にお忙しくて児童生徒と向き合う時間が取れないこと、授業時間が十分かどうかということ、この四点を是正していけば『学力』は上がっていくのではないか」と言われていたことである。

もう一つ、これも一〇年程前になるが、私は日本語の読み書き教室等に関する実態調査に携わったことがあった。そこで教えている方々のほとんどはボランティアで、元教員のほうが多かった。一方生徒の多くは、海外から来た企業実習生や留学生であった。指導者と生徒にそれぞれお話を聞くと、「教師というものに憧れ、学校で勤務していたが、実際には予想とはずいぶん違っていた。だがこは、私が思い描いていた姿がある。生徒は教わる者としての立場をわかまえ、少しでも教えてもらいたいという姿勢を見せている。やればやるほど、喜びを感じる。」生徒たちは、「自分の夢を果たすため、まず日本語を習得したい。先生は、少しでも自分が習得できるように工夫してくれている。感謝しかない。」言う。そして、商交渉に使うより高度な日本語の内容にやがて取り組んでいく。

確かな学力の向上を考えると、行政と学校現場のやるべきことは、おのずと整理できる。学校では、目の前の生徒たちの将来のことを考えつつ、時間をかけて丁寧にもがその内容を理解できているようにと教員は心血を注ぎ、そして学ぶものと教える者それぞれの立場が自覚され、真剣に取り組む空気を醸成している。それが常態化すれば、「思考力・判断力・表現力等の能力」「主体的に学習に取り組む態度」は、我々の想像を超えて育まれ、彼らが社会の中心となる時に、その力を発揮してくれるのではないだろうか。

(全日中副会長・前河内長野市立加賀田中学校長)